SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

張赫宙主要作品の編集からみる諸問題：主題・校訂・検閲などをめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029533

張赫宙主要作品の編集からみる諸問題

――主題・校訂・検閲などをめぐって――

南　富鎮

1．張赫宙作品選集の編集経緯

張赫宙の新たな作品集を編む過程で発生したさまざまな問題を整理しておく。

言うまでもなく、作品（テキスト）は作家によって生まれ、生原稿から校正過程、掲載雑誌を経て作品集や全集となっていく。あたかも有機物のような生成過程をたどる。今回、張赫宙日本語文学選集（『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』作品社、2022 年）を編むことでこうした実態を改めて実感した。

筆者が張赫宙選集を編集したのは今回で二回目である。最初に編集したのは『張赫宙日本語作品選』（勉誠出版、二〇〇三年）であった。ほぼ二〇年の間隔をおいての作業であった。それぞれの経緯は両冊の「はしがき」で詳しく紹介しているので全文を紹介しておく。

張赫宙日本語作品選（勉誠出版、2003 年）　張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代（作品社、2022 年）

■『張赫宙日本語作品選』（勉誠出版、二〇〇三年）の「はしがき」

今はほとんど忘れられた存在になってしまったが、張赫宙はかつての植民地朝鮮と日本でもっとも知られていた朝鮮人作家であった。日本文壇に朝鮮人として本格的に登場し、宗主国の言語である日本語で朝鮮の植民地的現実を盛んに訴えた。張のいくつかの作品は、植民地期の朝鮮人作家としてはきわめて珍しく、当時世界的な広がりを見せていたエスペラント語をはじめ、中国語やポーランド語やチェコ語などにも翻訳紹介された。そうした張の活躍は、世界的な連帯の中にいた植民地作家による「弱小民族文学」の朝鮮代表として、世界的な作家の勢いさえもつものであった。

文壇登場当初の張赫宙は「朝鮮の惨状を世界に知らせたい」という若い作家の情熱をもって、朝鮮の現状を宗主国の言語であった日本語で訴えた。日本語で書くことに彼自身はなんらの抵抗感も持たなかった。植民地主義が猛威を振るった時代だけに、植民地出身の、いわゆる「弱小民族」の作家が宗主国の言語で書くというのは世界文学史的に普遍性のある時代でもあった。張赫宙はそうした時代の朝鮮人作家の先頭走者として、さかんに日本語での表現を試みたのである。しかし、第二次世界大戦後、世界的連帯をもっていた「弱小民族」がそれぞれ近代国民文学をめざしていく中、行き場を失った張赫宙文学は一方的に批判され、忘却され、隠蔽される道を辿る。

世界大戦後、旧「弱小民族」はかつての宗主国をモデルにしながら、それぞれ自前の近代国民国家を創生しまたそれを支える自前のいわゆる「近代文学」を確保する必要性に迫られる。民族言語と民族精神は強化され、植民地時代の名残をとどめる曖昧な領域は排除される。さらに旧植民地国家の「近代文学」における薄弱な自己同一性の対他的な存在として、旧宗主国の言語と文学が想定される。韓国・朝鮮もそうした状況にあり、その対他的な自我がいわゆる「親日文学」となる。「親日文学」の想定によってそれと対抗する自前の「近代文学」の自画像が強化され、「近代文学」の正統性が確保されていくのである。張赫宙文学への批判・排除・忘却・隠蔽にはこうした旧植民地国家の「近代文学」の形成事情が深く介在しているようにも思われる。

本書の刊行は、近代の植民地主義からある程度の距離を確保できるようになった現時点で、張赫宙文学を読み直してみようという意図からのものである。現今、冷戦構造の崩壊を背景としたポストモダニズムの興隆に伴い、近代と植民地主義を総体的に見直す気運が高まっている。こうした時代的な情勢もあってか、張赫宙文学は新たに注目を浴び、その忘却と抹殺の封印が解かれ始めつつある。その先駆的な作業は白川豊氏によるもので、氏の詳細な研究によって張赫宙文学の封印が解かれ、その全貌が明らかになってきた。その意味でも同氏が本書の共編者となり、解説・年譜等を添えることができたことは本書にとって心強いことである。また、本書刊行の背景には、これまで張赫宙の主要な初期短編が再度単行本の形で編まれることがなく、戦前の作品集もほとんど入手困難な状態になっていた実情がある。そのため、一般読者をはじめ研究者においても張赫宙の初期短編を読むことがむずかしい状況にあった。本選集の刊行はこうしたさまざまな状況からの強い要望に応えるためのものでもある。選集というごく限られた形ではあるが、本書がそうした要望に少しでも応えられたら幸いである。

本書選集の編集にあたっては小説とエッセイをそれぞれ分けて掲載した。小説は張赫宙の初期作品をほぼ執筆年代順にならべた。しかし、「少年」だけは伏字があまりにも多いため本作品集に収めるのは控えた。エッセイは張赫宙の文学観をもっともよく伝えるものの中から六編を選定し、年代順に配列した。本選集所収の作品が全体的に初期の作品であるため、張赫宙文学の初期の特徴として、ややプロレタリア系列的な作品が集中的選ばれる結果となった。そのため、植民地期朝鮮の人間像を描いた多くの作品が割愛され、張赫宙文学の全体像としてはいくらか偏ってしまった観もあるが、それは一冊の単行本としては致し方がない。いずれ新たな作品集が編まれることを期待するほかない。（二〇〇三年六月）

■『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』（作品社、二〇二二年）の「はしがき」

今から一八年以上の前のことだが、二〇〇三年六月、筆者は張赫宙研究の先駆者である

白川豊氏の力をお借りし、南富鎮・白川豊編『張赫宙日本語作品選』(勉誠出版、二〇〇三年)を編纂した。それ以降、ポストコロニアリズムをめぐる文化研究の隆盛があり、越境文学やディアスポラ文学の流行があり、満州文学や植民地期日本語文学への再評価が行われてきた。その余波的恩恵によって、張赫宙文学も新たな解釈と評価を受けることになったが、その研究成果や評価は十分とは言えない。いまだに主要作品の多くを読むことが出来ない状態にある。時代的流行によって一部の作品が影印復刻されたが、それらの企画物はいずれも商業性や政治性が重んじられ、良質の主要作の多くが依然として埋没した状態のままである。

以前の共編著『張赫宙日本語作品選』の「はしがき」で、筆者は作品選集の「偏り」を解消するためには「いずれ新たな作品集が編まれることを期待する」と結んだが、その期待は一八年以上を経た現在においても満たされないままである。致し方なくまたもや白川豊氏の力をお借りし、二冊目の作品を編むことになった。前著が片脚だけの印象だったのでどうしても両脚が必要であった。小さなまとまりではあるが、前著の「偏り」を解消する一つの完結体として左右の姉妹を揃えておきたかった。本書を企画するに際しては以下の点に留意した。

1. 張赫宙の主要作や代表作のうち、前著の『張赫宙日本語作品選』に漏れ、戦後において再刊・再録されることがなかった作品を取り上げ、張赫宙文学の実態を幅広く紹介することを意図した。
2. 商業的目的や政治的意図からの選別ではなく、文学的に完成度の高い作品を取り上げ、バランス的に全体が俯瞰できるように意図した。
3. 張赫宙文学には植民地期の実態や実生活を知る資料的な性質の作品が多い。この点も編集の上で考慮した。
4. 本書で紹介する作品は一九三四年から一九四一年の夏に至るまでのものである。張赫宙が朝鮮大邱で旺盛な作家活動をし、日本に移住して懊悩し、太平洋戦争の渦に巻き込まれる直前までの作品である。

しばしば自己の問題と絡めて作家の文学的寿命と生活的寿命について考えることがある。作家には文学的に輝く文学的寿命と実際を生きる生活的寿命があり、両者がほとんどの場合において合致しないのではないだろうかという思いである。これが作家にさまざまな悲劇をもたらす。少なくとも作家を名乗る以上、文筆を生業とし、日々の生活のために書かざるを得ない。余技で書くのでは厳密な意味で近代小説家とは呼べない。そして張赫宙文学を考える時にはこの点が最も考慮されなければならないと思っている。朝鮮文学史のなかで、張赫宙はいちおう原稿だけで生活したほぼ最初の職業作家であった。渡日した一九三六年の夏からが特にそうであったと思う。こうした職業性は文学行為にもさまざまな特性と変化をもたらすことになる。

もし作家の文学的寿命というものがあるとすれば、張赫宙文学の寿命はデビューから職業作家として決心し、東京移住に至るまでがひとつのピークであり、その勢いは太平洋戦争の直前まで緩やかに続いていると考えられる。それ以降の戦時期の国策文学、戦後における厳しい文筆活動は張赫宙文学の本質とは程遠いものであったような気がする。おそらく本人にとってもじつに不本意な文筆活動だったのではないだろうか。作家の文学精神と時代精神が符合せず、時代の変動によって内部矛盾は次々に拡張し、収拾がつかなくなる。時代は作家を置

き去りにし、はるか向こうへ通り過ぎてしまう。時代に取り残された職業作家は生活的な困窮のなかで孤立する。これは張赫宙文学の軌跡で、また近代作家一般の宿命でもある。

本書の収録作品を一九四一年の初夏で止めたのはこうした認識からである。しかし当初からこれを計画したのではない。文学精神と時代精神が合致した優れた作品を選んでいるうちにおのずとこうした結果に到達したところもある。封建朝鮮の象徴である「仁王洞時代」から近代日本の「路地」に至るまでの過程や、「橋の上にて」彷徨する作家自身の姿を通して近代朝鮮が経験した波乱と苦難に満ちた記憶の一端を示しておきたかった。張赫宙文学の本質がそこにあり、それがまた張赫宙が到達した最も記念すべき文学的頂点であると思ったからである。

本書は前著『張赫宙日本語作品選』と姉妹編をなすものであるが、これをもってひとまずの完結としたい。次作を編む余力が私には残っていない。はたして後続の作品集が編まれる日がいずれ来るのだろうか。それは後生にお任せする次第である。(2021 年 11 月 1 日)

二〇〇三年編集の『張赫宙日本語作品選』は張赫宙初期のプロレタリア文学系統の作品を中心に編んだもので、小説が一一本、エッセイが六本収録されている。二〇二二年編集の『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』に収録したものはプロレタリア文学とはやや系統の違うもの、おもに来日以降から太平洋戦争直前までの作品が中心である。小説が一一本、エッセイが八本である。合わせて小説が計二二本、エッセイ計一四本が新しく編まれたことになる。ほとんどが戦後初めて編まれたものである。両冊に収録された作品を紹介する。

■『張赫宙日本語作品選』(勉誠出版、二〇〇三年)収録作品

小説:「白楊木」「餓鬼道」「迫田農場」「追はれる人々」「兄の足を截る男」「奮ひ立つ者」「権といふ男」「山霊」「女房」「ガルボウ」「山犬(ヌクテ)」

エッセイ:「僕の文学」「我が抱負」「私に待望する人々へ――徳永直氏に送る手紙」「朝鮮文壇の現状報告」「朝鮮文壇の将来」「朝鮮文壇の作家と作品」

■『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』』(作品社、二〇二二年)収録作品

小説:「仁王洞時代」「十六夜に」「一日」「墓參に行く男」「山男」「アン・ヘエラ」「狂女點描」「月姫と僕」「憂愁人生」「路地」「橋の上にて」

エッセイ:「特殊の立場」「私小説私見」「理論の貧困」「「春香伝」について」「私の小説勉強」「今日の朝鮮文學」「明日の朝鮮文學」「正確なる理解」

2. 収録作品の紹介と解釈

すでに刊行された張赫宙作品選集に収録された小説作品についての書誌を紹介する。それに付随して個別作品の意義や解釈、評価などを簡潔に添えていく。

2-1.『張赫宙日本語作品選』(勉誠出版、二〇〇三年)収録作品

「白楊木(ポぷら)」

初出は『大地に立つ』(二巻一〇号)一九三〇年一〇月号。初出の題目は『白揚木(ぽぷら)』と誤記されている。作品はのちに野口赫宙の筆名で『土とふるさとの文学全集』(第三巻、家の光協会、一九七

六年）に収録され、本文の内容にも一部の修正が加えられている。本書では初出を底本にした。
■ごく短いものだが、張赫宙文学の方向性を象徴する作品である。零細地主と小作の対立を描いているが、その背景には植民地的な現実が覗かれる。日本からもたらされた近代資本主義によって旧来の地主と小作の関係性は壊れ、共に衰退の道をたどる姿が簡潔な筆致で描かれている。表面的には新教育を受けた地主の放蕩息子と小作である爺によるポプラの帰属をめぐる対立と、放蕩息子の横柄さであるが、その背景には植民地期的な矛盾が垣間見られる。爺の長男が出稼ぎに行った大阪で事故死したのもその一例であろう。

「餓鬼道」
初出は『改造』（一四巻四号）一九三二年四月号。第五回『改造』懸賞創作第二等当選作。のちに作品集『権といふ男』（改造社、一九三四年）に収録。作品集収録にあたり改行や誤植の訂正などが行われている。なお、初出の末尾には「一九三一、一〇」と、脱稿日付が付されている。張赫宙は原稿に脱稿日付をよく記して置く傾向がある。本書では初出を底本とした。
■雑誌『改造』の懸賞当選作で、張の作品のなかでもっともプロレタリア文学の性質が強いものである。対立構造、搾取形態、結束過程、争議化と襲撃、宣伝ビラの掲載など、日本プロレタリア文学の手法を模範とし、それを被植民地になっている朝鮮半島に反映した作品である。ある種典型的なプロレタリア文学作品と言える。作中の灌漑工事と争議事件は実際にあった事件を小説風に加工したものと思われる。
　ちなみに、作品背景である「梨谷」は筆者の叔母の婚家先で、幼い時に祖母に連れられてこの村を何度か訪問したことがある。初期張赫宙文学の多くは醴泉郡知保面の梨谷、知保里（祖母の実家）を背景にしているが、その地形描写は正確である。実際の場所や空間とほぼ一致している。

「迫田農場」
初出は『文学クオタリイ』（二号）一九三二年六月。初出の末尾には「一九三二・三・三〇」と、脱稿日付が記されている。初出で頻出する「××」は「釜山」のように思われる。本書は初出を底本とした。
■プロレタリア文学的な特性の強い作品である。やや特徴的なところは、日本人地主が朝鮮で資本を獲得していく過程が詳細に描かれていることである。また日本人地主を一概に打倒すべき「悪」としたのではなく、朝鮮農民に理解のある日本人地主、搾取型の日本人地主に分けていること、搾取を積極的に主導していくのは没落両班階級の朝鮮人であるという指摘がなされている。旧朝鮮の没落した特権階級と日本の新資本家の結託が痛烈に批判されている。

「追はれる人々」
初出は『改造』（一四巻一〇号）一九三二年一〇月号。初出の末尾には「一九三二、六」と、脱稿日付が記されている。作品はのちに野口赫宙の筆名で『土とふるさとの文学全集』（第三巻、家の光協会、一九七六年）に収録された。収録の際、初出に見られる多くの伏字は起こされ、ほぼ完全な状態に復元されている。しかし、本書ではあえて初出を底本にした。戦後に刊行された『土とふるさとの文学全集』収録作は、作者によって復元されたもうひとつの「追はれる人々」という認識も可能だからである。「追はれる人々」の伏字の問題については本書での白川豊氏の解説を参照されたい。なお、本文中の「入人（ヴエイン）」（一〇七頁上段二行）は朝鮮語で「ヴエイン」とルビが付されていることから本来は「倭人」で、「入人」は検閲で削除された結果のように思われる。本書は初出を底本とし

た。
■張赫宙文学を代表する優れた短編である。被植民地の農村社会になにが発生し、農村がどのような状態に陥ったのか、またその原因は何であるかを、一農村部落から総体的に描いた作品である。東洋拓殖会社による資本の収奪があり、日本から近代資本が大量に流入され、日本人植民者の移住が行われ、旧朝鮮的な秩序と資本構造は完全に崩壊する。徐々に窮乏して満州や日本へと追われていく朝鮮人農民の姿が過不足なく描かれている。移民問題は張赫宙文学の中心テーマで、その起源は「追はれる人々」から始まると言える。多数の言語で翻訳され、世界的にも評価が高かったのはこの問題のもつ共通性所以であろう。

「兄の脚を截る男」
初出は『文芸首都』(一巻五号)一九三三年五月号。初出の末尾には「一九三三、三」と、脱稿日付が記されている。のちに作品集『権といふ男』に「兄の脚をきる」という題目で収録された。本書は初出を底本とした。
■盗癖を持つ兄を戒めるために兄の脚を截るという内容で、作品の付記によると、朝鮮末期の実話であるとする。事件の原因として身体性が取り挙げられていることは、その手法として日本の自然主義作品とも軌を一にしている(例えば田山花袋「重右衛門の最後」)。内容的には朝鮮王朝の腐敗を厳しく批判したものである。代表作「仁王洞時代」との共通性がある。朝鮮文学はしばしば前近代(朝鮮王朝)への強い郷愁をもち、反近代的な傾向が強い。いわば反近代の文学である。しかし、張赫宙文学はこれとは逆で前近代であった朝鮮王朝への批判が厳しい。

「奮ひ立つ者」
初出は『文芸首都』(一巻九号)一九三三年九月号。作品の過激さにより雑誌は発売禁止処分を受け、作品集に収録することが出来なかったという。本書は初出を底本にした。
■ややプロレタリア文学系統の作品であるが、現実認識と描写はとても優れたものである。プロレタリア文学に見られがちな大上段のイデオロギーではなく、現実的な必然性によって抵抗が導かれている。植民地期朝鮮の教育現場や授業内容、日本人教員と朝鮮人教員の関係性、農民の困窮と鬱屈した精神心理などが克明に描かれている。「奮ひ立つ者」は日韓のプロレタリア文学の中で最も優れた作品の一つであろう。主題は、『権といふ男』収録の「少年」と共通するところが多い。
　ちなみに、筆者は幼い時(1970 年前後)に、祖母に連れられて橋のない乃成川を徒歩で渡り、背景の村で一時休んだ後、谷を越え、叔母の婚家先であった梨谷(「餓鬼道」の舞台)を訪ねたことがある。背景の村には夜学と教会があり、祖母からこの村はかつて知識青年たちの活動が盛んであったこと、今日の言葉で言うと「進歩的」な村であることを聞かされた朧気な記憶がある。

「権といふ男」
初出は『改造』(十五巻十二号)一九三三年一二月号。のちに作品集『権といふ男』に収録された。さらに戦後、作品集『愚劣漢』(富国出版社、一九四八年)、『現代日本文学全集』(八七巻、一九五八年、筑摩書房)にそれぞれ再録された。本書は初出を底本にした。
■張赫宙文学を代表する短編である。人間の欲望をリアリズム手法で解剖しながら、その心的な行動の変化を丁寧に追いかけた作品である。張のこうした手法によって植民地的現実がリアルに活写されているといえる。植民地期を描いた韓国朝鮮文学はしばしば時代的現実を観念的に捉える傾向がある。支配や被支配、弱者や強者の対立的な図式である。そのため、時代を生きている人

間の生々しい姿が見られない。張赫宙文学の最大の特徴、あるいは最大に評価されるべき資質はこうした描写の力である。張赫宙が植民地的現実をリアルに捉えることが出来たのは日本語、とくに日本の自然主義文学の文体によるものであろう。

「山霊」
初出不詳。作品集『権といふ男』に収録。作品は中国語に翻訳され、『山霊』(一九三六年、文化生活出版社、翻訳者は胡風)、『弱小民族小説選』(世界知識者編、一九三六年、上海・生活書店、訳者は馬荒)に収められている。本書は作品集『権といふ男』を底本にした。作品の創作時期は詳らかでないが、一九三三年に書かれたものと推定される。
■プロレタリア文学の性質が強い作品である。近代資本によって都市から農村へ、農村から山村へ追われていく底辺の朝鮮民衆を描いた作品である。移住先が満州や日本ではなく、朝鮮半島の山奥の方向である。焼き畑農業のすえ、冬季の寒さと飢えに耐えかね、悲惨な末路をたどる山民の悲劇を丁寧に描いた作品である。

「女房」
初出は『文芸首都』(二巻一号)一九三四年一月号。のちに作品集『権といふ男』に収録された。本書は初出を底本にしたが、初出には誤植が多く落丁も見受けられ、作品『権といふ男』と対校して誤植と落丁を補った。初出の末尾には「一二月五日」という脱稿日付が記されている。
■朝鮮人地主に懇願するしたたかな農民の姿をリアリズム風に描いた作品である。張自身の言う典型的な「性格小説」であろう[1]。小賢しい農民に対する朝鮮人の小地主が抱えている苦悩、地主と農民の個性が演出する複雑な現実が生き生きと描かれている。プロレタリア文学というより人物の性格を描写することに主眼が置かれているようにも思われる。性格描写は張赫宙がもっとも得意にしている分野である。
張は「私に待望する人々へ――徳永直氏に送る手紙」のなかで、日本文壇が自己にプロレタリア文学者としての活躍を期待することに強く反発しているが、これは張自身が持っている文学的側面(いわば文体)が性格描写を得意にしていたとことも関係しているであろう。張の文章は人間の些少な個性にこだわるリアリズムの文体で、集団的な理念を大雑把に描くには不向きである。

「ガルボウ」
初出は『文芸』(二巻三号)一九三四年三月号。作品はのちに『権といふ男』、戦後の『愚劣観』にそれぞれ収録された。本書は初出を底本にした。
■前作の「権といふ男」同様、張赫宙文学の最高傑作の一つである。その理由は前述と同じである。張自身の言ういわゆる「性格小説」である。付言しておきたいことは、この作品は一九三〇年代の農村風景、前近代的な市場の風景と雰囲気をよく伝える資料性が高いことである。筆者は幼児のとき、作品と同じような酒場の風景を目撃したことがある。古い朝鮮のほぼ最後の姿であった。

「山犬(ヌクテ)」

---

[1] 張赫宙は「正確なる理解」(『知性』一九四〇年一〇月号)のなかで、「權といふ男」「ガルボウ」「十六夜に」を、「人間の利己欲や醜悪」を描いた「性格小説」と分類している。

初出は『文芸首都』(二巻五号)一九三四年五月号。のちに作品集『仁王洞時代』(河出書房、一九三五年)に収録された。初出の末尾には「一九三四、三」という脱稿日付が記されている。なお、朝鮮語訳が『三千里』(七巻八号)一九三五年八月号に掲載された。本書は初出を底本とした。
■小品だが、近代へと変化していく農村風景を見事に描写した作品である。人物造形と性格描写がとくに優れている。前近代的な価値観にとらわれている崔とは裏腹に、許嫁の蓮花は新しい時代の山林監督に心を惹かれていく。旧時代(許嫁、森林の乱伐、農民)と新時代(恋愛、森林の保護、末端公務員)が対立し、旧時代の自滅的な崩壊(殺人)が浮き彫りになっている。一九三〇年代の農村風景を的確に捉えた作品と言える。

2-2.『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』』(作品社、二〇二二年)収録作品
「仁王洞時代」
初出は『児童』(一巻六号)一九三四年一一月号、(一巻七号)一九三四年一二月号、(二巻一号)一九三五年一月号、(二巻二号)一九三五年二月号、(二巻三号)一九三五年三月号の全五回にわたり連載された。初出誌第一回には「長編小説　靈と肉――仁王洞時代――」と副題が付されており、初出誌第五回の最後尾には「(第一章、完)」と記されていることから、長大な作品として計画されたことが窺える。なお、予告では「幼年時代」となっていた。初出誌の「靈と肉――仁王洞時代――」は単行本『仁王洞時代』に収録される際、「靈と肉」が削除され、「仁王洞時代」として収録される。単行本最後尾には「夜る長編の第一部」と記されており、「夜る」は「或る」の誤植とも考えられるが、いずれにしろ、「仁王洞時代」は長編小説の一部分として構成されたことが窺われる。初出誌と単行本においては単語や読点、踊り字、仮名遣いの微細な相違がある。本書は『仁王洞時代』(河出書房、一九三五年)を底本とし、初出誌で一部を補った。
■「仁王洞時代」における「仁王洞」とは張赫宙の本貫が仁同張氏であり、朝鮮王宮の背後に聳え立つ岩山が仁王山であることから「朝鮮王朝時代」を暗示しているように思える。作品では仁王洞時代が終焉し、主人公は先行きの見えない暗闇の中で仁王洞を脱出しているが、その場面は張自身の波乱万丈な一生と重なり、過酷な運命をたどる近代朝鮮の歴史を予見しているようにも思われ、きわめて象徴的である。近代朝鮮の夜明け前の様子を捉えた張の代表作とも言えよう。島崎藤村『夜明け前』を意識したのかもしれない。張が書いた多くの自伝風作の中核をなす作品でもある。
　ちなみに、初出誌第一回の冒頭には「作者の言葉」、最後尾には「讀者諸氏へ」が載せられている。それら全文を紹介する。

作者の言葉

その内容は主人公の自己教育といつたもので、形式は生ひ立ちの記みたいになつてゐますが、單なるそれでなく幼少年時代の自己認識、自己發展、自己教育など全く特殊な内容をもち……もしそれが出來た曉、小生は全く異種の、そして最高の藝術を包含する小説が生まれることを信じ、今から嬉しくなつてゐます。甚だ失禮ですが今のところ御誌創作欄はまだ特殊存在で文壇的ではないですが――それ故に特に小生は今の劃をたてましたが――小生は全力を注いで、他の如何なる文壇誌にも優れた小説をのせたいと自ら望んでゐます。小生は小生の頭の中のこの獨創的な事象をもしこの手紙で尚明に描き得て、お知らせすることが出來れば、と、はがゆく思つてゐます。

讀者諸氏へ

本誌に連載する分は長篇「靈と肉」の第一章「仁王洞時代」だけですが、全章を通じて封建

末期の、朝鮮の地方貴族の家庭を背景にしてゐますので、習慣風習を異にしてゐる讀者諸氏に成るたけよく分るやうにかいたつもりです。しかし、尚不審のある讀者は小生へ質問して下さつたら直接回答した上、まとめて註を附したいと思ひます。——作者。

■張赫宙と魯迅：張赫宙の代表作といえる「仁王洞時代」の冒頭は次のような封印された記憶の話から始まる。

私はなるだけ回想だとか追憶だとか言ふ風なことはしないことにしてゐる。過去をふりかえることは私には確に一つの大きな苦痛であるやうだ。

私がもし私の幼年時代のことをふと憶ひ出したとする。すると私は直ちに暗がりと魘されるやうな壓迫感とに、胸は狭心症にかかつたかのやうに苦しくなり、いつ果つやも知れんやうな嗚咽が咽喉へこみ上つて来て、私の眼には悲劇俳優のやうに涙滴が湧き上り頬を濡らすのだ。（「仁王洞時代」）

張赫宙には「魯迅その他」（『わが風土記』収録、赤塚書房、一九四二年）という評論がある。魯迅の日本語訳は、多少「中国語的日本語や言ひ回しの稚拙」はあるにしても、「言語の調子」を的確に現わしていると称賛（？）した文章であるが、魯迅に対する複雑な対抗意識が垣間見られている文章である。

張赫宙の作品には一読してすぐに魯迅を連想する作品がいくつかある。魯迅「狂人日記」を連想する「狂女点描」がそれである。狂人、狂女の口を借りた現実批判の手法はほぼ類似している。もう一つ、次に紹介する「十六夜に」は魯迅「故郷」を連想させる。作品テーマや人物設定の類似性から、張赫宙が魯迅「故郷」を強く意識したのかもしれない。両作の印象的な冒頭部分を紹介しておく。

きびしい寒さのなかを、二千里のはてから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ故郷へ近づくにつれて、空模様はあやしくなり、冷い風がヒューヒュー音を立てて、船のなかまで吹きこんできた。苫のすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。おぼえず寂寥の感が胸にこみあげた。（魯迅「故郷」竹内好訳、岩波文庫）

一九二×年、八月二十日、この夕方、私は六七年ぶりに生まれ故郷の土地を踏んだ。私は自分の勤務地から汽車で、途中自動車に乗換へ、更に三四里馬車に揺られながら、烈日が西空に急傾斜した頃ほひ、この梅花村から一里程離れた峠下の村についたのだつた。（張赫宙「十六夜に」）

張赫宙と魯迅の現在における評価の落差は甚だしい。こうした評価の落差を決定づけたのはおそらく二人の背後にある国家と歴史の相違であろう。近代史における中国と朝鮮の立場の相違が二人の文学的評価の運命を決定づけたと思われる。朝鮮史の悲劇が張赫宙文学の悲劇でもあったと思われる。背後を支える国家と民族の存在が評価の落差を生んだのかもしれない。

「十六夜に」

初出は『文藝』(二巻一一号)一九三四年一一月。初出誌には「十六夜に――梅花村に關する第一ノート――」という副題が付されている。初出誌の作品最後尾には「(第一ノート完)九・三〇」と記され、本作が連作の一部として計画されたことが窺える。「九・三〇」とは原稿の脱稿日を示すもので、張赫宙の作品によく見られる特徴である。作品は『仁王洞時代』に収録される際に副題が削除され、同じ形で『愚劣漢』(富国出版社、一九四八年)にも再録されている。初出誌と単行本においては単語や読点、踊り字、仮名遣いの微細な相違がある。本書は『仁王洞時代』を底本とした。
■新旧朝鮮の姿や人物が過不足なく描き分けられ、古い朝鮮的な秩序と新しい近代朝鮮の萌芽が入り乱れている時代情景がリアルに描かれている。混沌とした近代朝鮮の黎明期を捉えた秀作である。背景の古風な船遊びは、今日の「河回綱花火祭」(Julbul-Nori of Hahoi)の再現で見ることが出来る。[2]

「一日」
初出は『改造』(一七巻一号)一九三五年一月号。のちに『仁王洞時代』に収録。初出誌と単行本においては校正による単語や読点、踊り字、仮名遣いの微細な相違がある。本書は『仁王洞時代』を底本とした。
■植民地期における一小市民の生活実態を克明に描いた作品である。従前の社会主義運動が崩壊し、近代資本主義が強化されていくなか、小市民をめぐる哀切な生存の現実がありのまま活写されている。人間と社会の模様を一日で凝縮して切り出すという手法はリアリズム文学によく見られる典型的な特徴でもある。

「墓參に行く男」
初出は『改造』(一七巻八号)一九三五年八月号。単行本未収録。本書は初出誌を底本とした。
■植民地期における左派運動の実態をリアルに描いた作品で、その歴史的な意義は高い。左派運動に関わる青年たちの複雑な人間模様、内ゲバや内部分裂、裏切と変節等が赤裸々に描かれている。戦後の韓国で激しく行われた学生運動(いわゆる民衆化運動)との類似性が強く窺われる。

「山男」
初出は『新潮』(三三巻一号)一九三六年一月号。単行本未収録。本書は初出誌を底本とした。
■典型的な写実主義の方法で、野生のままに生きる青年の姿を客観描写によって捉えた作品である。筋や内容より身辺雑記の人物描写法に重点が置かれたように思われる。
　同巻号には企画記事「作家としての心構え・覺悟」が載せられているが、張赫宙は次のような一文を寄せている。全文を紹介する。

> 文壇的雰圍気の全然無いところに住んでゐますので、文壇的刺戟を受けることは非常に希薄です。しかし私は私自身や他の人達の生活を客觀的に眺めた時や、風變りな自然、他の土地

[2] 綱花火祭 (Julbul-Nori) に関連する紹介は、金源吉「河回綱花火祭の由来と再現方法」(『月刊東西文化』一九八二年三月号) 及び「調査報告書」(金源吉、私家版) に詳しい。

の風土味などに接する場合など私の胸は藝術的衝動でわくわくしそれを表現せずんば已まないといふ狀態になります。このことが私としてこれまでもこれからも、下手くそながら小説を書かす重要な原因になつてゐます。だから私は外部からの刺戟が全然なくとも、この内部の衝動さえあればよい譯ですが、もしこれがなくなつた場合、私の作家生活は勿論私の生命までもなくなるものと思へてなりません。（張赫宙）

「アン・ヘエラ」
初出は『文學案内』（二巻一号）一九三六年一月号、（二巻二号）一九三六年二月号の「朝鮮・台湾・中国新鋭作家集」企画（ほかに呉組緗「太平天下」、賴和「豊年」を収録）として連載された。初出誌の題名は「アン・ヘェラ」であるが、単行本『愛憎の記録』（河出書房、一九四〇年）に収録される際には題名表記が「アン・ヘエラ」と変更される。また初出誌の単行本収録においては大きな変更がなされている。会話文の膨大な修正が行われている。また検閲の形跡が激しく、それによって内容がやや歪められている。二つの版本にはそれぞれの問題点があるが、本書は『愛憎の記録』を底本としながら、初出誌を参照に検閲による削除や変更の箇所を補うなどした。
■女主人公側の手紙のみによる奇抜な構成、女言葉の流麗さと巧みな筋の展開など、張の日本語力と小説技法の力量が遺憾なく発揮された作品である。張自身わざとそれを意識したようにも思われる。内容は農村の困窮と満州移民を扱ったもので、後の満州開拓小説を先取りしている。植民地教育制度、朝鮮農民の惨状、満州移民という張赫宙文学のすべてが網羅されている。張赫宙文学を代表する傑作と言えよう。ちなみに、アン・ヘエラという人名は朝鮮語で「するな！」「しない！」という強い禁止の言葉と同音である。
■検閲の問題
戦前における日本の検閲は一般的に伏字（×印や……印等々）の形態を取り、削除した文字数や分量が推定できる形態を取っている。そのため、日本の検閲はその形跡がはっきり分かる形態を取っているという一般言説がある。他方で、戦後のアメリカ GHQ による検閲は検閲の形跡が残らないように、版組の前に自然な文章体になるように改変を要求していたとも言われている。眼に見えるような形跡を残さない検閲の形態を取っているということである。しかし、張赫宙「アン・ヘエラ」をみる限り、この言説は必ずしも正しくない。アメリカ GHQ 方式と言われる文章の事前改編が要求する検閲が大幅に行われているからである。検閲事項に該当する部分が削除されたり、変更させられたりしている。その箇条は多く分量も長い。その主な箇所を示しておく。

①削除部分（十月二十八日の手紙）
底知れん悲しみ、堪えられない憤り、そんなやうな興奮で私の體は何だか燃えたつやうな、ええ、さうですわ。あたしの身近くの物といふ物を悉く投げつけ、ぶつこわしたいやうな衝動にかられましたの。
――あなたの學校ばかりでなく、この土のありとあらゆるところの、吾々の先輩の遺事は凡てさういふ運命にあるんです。例へばあなたの學校。三一運動以後、そのような私塾が四方に蔟生し、吾々の再生は吾々第二世の教育から、といふ信念と希望に燃えてゐたのでした。だのに、今は全土に僅か數十校。その哀れな殘骸も昔時の意志のあらう筈はありません。それは卽ち吾々の固有の色彩の消滅を餘儀なくすることに外ならず、考ふれば僕にしたつて心は益々暗くなるばかりです。
――

私はお手紙の中のこの一節を繰りかへし、繰りかへして讀みましたの。全くですわね。吾々の固有の色。あたしよく分りますわ。ここいらの人々の生活感情の上にも、それは不思議にも反映してゐますわ。時勢の力ですわね。古い土の色がこうして何十年後には全く消え失せてしまふかと思ふと、私、何ともいへない苦しみにくるしまされますのよ。

でも、私などいくら悲しんだつて仕方がありませんわね。私もう心を静めますわ。

②削除部分（十二月八日の手紙）

最初は小作人組合を組織して社會主義的に地主に對抗したんださうですが、さうするにはあまりに村の人達が無智でどうにもならず、一度は自然發生的な暴動が起き、彼をはじめ數十人の犠牲者を出しただけで何の效もなかつたんですつて。彼はその後は、彼自身完全に農民になりきつて、他に何か救濟の方法がみつかりはしないか、と、例へば最近よく言ひ出してゐる自力更生つてものを、既にその時分やり始めたんですつて。副業を奬勵し、貯蓄をすすめ、生活改良を敎へなどしたんですつて。ですが、それも永つづきせず、年々窮乏の度は益々酷くなつて行くだけで、恰度私がここへ来たときにも、彼は臨時に敎員を務めながら、今度は村の若い者の敎育に手をかけたんですが、

③変更部分（十二月十七日の手紙）

［初出誌］こういふ狀態につけこんだかのやうに、郡當局では、北部朝鮮と滿州の方へ移民募集の布告を出しましたの。すると、もう村の大半が移民團に参加の申出をしてゐますわ。

ですけど、眞秀は村の人々を説いて、成可く故土を離れんやうにと努力してゐますの。彼自身もほんとうは移民に加はらなけりやならない狀態なんですが。

彼の説いてゐる要點といふのは、この移民が單なる移民ならまだいいけれど、ある政策のもとに、村の人々を北へ北へと追ひやる爲にやるのだと、こういひますわ。だから、死の最後の一線までは生地にかぢりついてゐたいんですつて。

［単行本］こういふ狀態のところへ、北部朝鮮と滿州の方へ移民募集の布告を出しましたの。すると、もうあちこちで移民團に参加の申出をしてゐますわ。

④削除部分（十二月二十日の手紙）

ですから、あたしも停車場まで別れに行きますわ。いいえ、やはり行かないことにしませう。

停車場まで僅かに三里ですけど、一歩々々涙で濡らしさうですわね。

⑤変更部分（十二月二十日二伸の手紙）

［初出誌］彼は、移民達をこのまま行かすのに忍びないといひ、

［単行本］彼は、皆と一緒に新しい世界で雄々しく立ち上るんだと勇みながら、

以上、主な削除と変更の箇所を示したが、これは細部にも見られる。こうした削除と変更によって初出における植民地教育政策への厳しい批判、満州国策移民への強い反対、故郷を離れて満州移民へと追われる朝鮮王民の惨状と悲しみが大幅に薄められている。しかも削除や変更によって作品内容が一貫性を失って矛盾を来し、作品自体もやや破綻気味になっている。削除と変更は張赫宙自身の持論とも大きく矛盾しており、おそらく作者にとってはきわめて不本意なものであっただろう。なぜ単行本収録時にこのような削除と変更が行われているのか、またそれが当局による検閲なのか、出版社による予防検閲なのか、あるいは張自身による自主検閲なのかも不明である。しかし、なんらかの形で大幅な検閲または自主検閲を余儀なくせざるを得ない状況が発生していたことは間違いないであろう。

「狂女點描」
初出は『文藝首都』(四巻三号)一九三六年三月号。単行本未収録。本書は初出誌を底本とした。
■狂女の口を借りて植民地的現実を批判し、その矛盾を暴露した作品である。しかし構造自体はきわめて類型的なものと言える。そのため現実が十分に掘り下げられておらず、表皮をなぞる一過性の批判で、張の他の作品に比べると現実描写がやや粗い印象である。

「月姫と僕」
初出は『改造』(一八巻一一号)一九三六年一一月号。単行本未収録。本書は初出誌を底本とした。
■女主人公「月姫」は白信愛(小説家)がモデルである。白信愛は日本人作家たちによってもその人物像が描かれており、白信愛自身による日本語創作も多数存在する。作中のロシアへの亡命企図は白信愛自身によるロシア体験である(拙著『文学の植民地主義』世界思想社、二〇〇六年を参照)。白信愛との不倫は張の東京行きの決定的な要因となる。東京移住後まもなく書かれたきわめて自伝的な作品である

「憂愁人生」
初出は『日本評論』(一二巻一〇号)一九三七年一〇月号。のちに単行本『春香伝』(新潮社、一九三八年)に収録。初出誌と単行本においては単語や読点、踊り字、仮名遣いの微細な相違がある。本書は『春香伝』を底本とした。しかし、関釜連絡船の乗船場面における差別待遇を批判した「私は朝鮮人だとことさらにああいふ待遇をすることには考へなつかた。」という一文が丸ごと単行本では削除されているので、伏字に類似する検閲とみなし、初出誌のほうを復元した。
■内鮮結婚と混血児をめぐる日本社会の差別問題を描いたものである。これらは日本人野口女史との結婚生活が強く影響しているように思われる。日本で生まれてくる子供らの将来への憂慮からであろうか。日本で死んだ父母や妹の墓を木碑から石碑に建て替える主人公の決断は在日朝鮮人の誕生を暗示するものであろう。

「路地」
初出は『改造』(二〇巻一〇号)一九三八年一〇月号。のちに単行本『路地』(赤塚書房、一九三九年)に収録。初出誌と単行本においては単語や読点、仮名遣いの微細な相違がある。本書は単行本『路地』を底本としながら初出誌から多くを補った。
■本作はルポルタージュ「朝鮮人聚落を行く」(『改造』一九三七年六月号)の内容が下敷きになっているもので、在日朝鮮人問題を本格的に扱った最初の作品と言ってよいだろう。主人公許晋は「親類といひ、郷里の人と言つても、何の情愛があらう」と述べながら、「この東京の方をずつと親み深く感じてゐる」と吐露しているが、こうした心情こそ在日朝鮮人の誕生と密接に関わるであろう。在日文学の始源であり、嚆矢となる作品と言える。

「橋の上にて」
初出は『藝能科研究』(八巻五号)一九四一年六月号。単行本未収録。本書は初出誌を底本とした。

■芥川龍之介「トロッコ」を連想させる本作は張にとってはやや異色の小品である。東京に居住を変えた張自身の心情の無意識的な吐露であろうか。橋の上に立ち、両岸の間で宙ぶらりんな主人公の不安と憂鬱が見られる。小品ではあるが、張赫宙文学の根本性格と張自身の人生観や立場を象徴しているようにも思われる。人間性格の根源的な「利己心」と自己性格の「いじけ」は張赫宙文学に執拗低音をなしているが、前者はキリスト教的な潔癖性、後者は植民地期における朝鮮民族性の言説が無意識に影響しているようにも思われる。他方で、東京移住以降、張の作品は以前の伸びやかで生き生きとしたリアルな生命力（例えば「權といふ男」「ガルボウ」「十六夜に」「アン・ヘエラ」に見られるような）を失い、不安と憂鬱に満ち、いわば構えてかかる硬く重苦しい色彩を深めていくようにも思われる。張赫宙文学の大きな分岐点であったに違いない。

3. 検閲の問題

張赫宙の作品には多くの検閲の跡がある。個別作品に見られる検閲の痕跡、形態とは作品の個別紹介で述べているが、張赫宙ほど検閲を受けた作家は日韓（日本と植民期朝鮮）においても少ないかもしれない。プロレタリア文学作品につきものの労働争議や社会主義革命等に関連する内容だけでなく、植民政策に関連する繊細な民族問題が検閲の対象になっているからである。張赫宙に関連する検閲はおもに二つの形態で行われている。

ひとつは、「アン・ヘエラ」で述べたように、削除、書き換えによる改編の形態である。表面上には検閲の痕跡が見えない形態である。いわゆるアメリカ GHQ 方式というような検閲である。

もう一つが、一般的な伏字によるものである。張の初期プロレタリア文学系統の作品にはこうした伏字が多く見られるが、とくに激しいのが『権といふ男』に掲載されている「少年」（初出不明、一九三三年頃？）である。作品は多くの伏字によって内容の把握さえ容易ではない。

> 趙先生は、××××××××××××××、××××××××××、××××××××××、××××××××××××××××××××××××、と言った。×、××××××××××、×××××××××××××と言った。×××××××××××××××、×××××××××××××××××と言った。哲善は、××××、×××××××××××××××××、趙先生は、××××××××××××××、×××、×××××××××××××××、×××××××××××××××、×××××××××××××××××××、×××××××××××××××××、と話した。趙先生はそれを夜学の童話の時間によく話した。

「少年」にはこうした箇所が随所にあり、細部の筋を把握することは困難である。こうした伏字だらけの作品をあえて処女作品集『権といふ男』に収録した張と編集部の意図はどこにあったのだろうか。しかし、戦時期の「アン・ヘエラ」（単行本『愛憎の記録』収録作、河出書房、一九四〇年）になると、こうした伏字は一掃され、版組の段階で削除や改変を余儀なくされる。張赫宙が戦時期に書いた満州開拓文学系列や文禄慶長（壬申倭乱）の役を扱った長編小説を読むときには、こうした目に見えない検閲に留意しなければならい。描写が不十分だったり、突然に筋か変わったりする。初出が存在しないことからそれらを対照して確認することはできない。さらに言えば、張赫宙は戦前においても戦後においても最も検閲に晒された作家であった。戦前は日本帝国によるもので、戦後においては南北政治状況によるものであった。

4. テキストの揺らぎと版組の問題

テキストはさまざまに揺らいでいるが、それが作者の意図に反してもっとも顕著に現れるのが前述した検閲である。しかし検閲ばかりではない。あまり注目されることはないが、じつは版組作業において不本意な多くのテキストの揺らぎが発生している。それは戦前の活字本における改行と改頁の特性から発生している。従来の活字版組は半角の処理がほぼ自動的に行われる今日のパソコン版組と違い、たいへん煩瑣な作業になる。たとえば、改行において、行末の半角（おもに読点や終止符などの文章記号）はしばしば削除される。原稿には本来あったはずの読点や終止符が削除され、テキストの揺らぎを発生させる。頁を替える時には本来その場所にあったはずの段落（一行空き）が無視される。しかし問題は作品集や選集などの作業においてこの方便的な揺らぎがそのまま踏襲されていることである。当たり前だが、初出、作品集、選集におけるページの行数、行における文字数はそれぞれ違う。そうなると旧来の方便的な揺らぎが定着し、新たな版組によって今度は新しい間違いが発生する。不本意な揺らぎ（版組過程における間違い）がさらに増幅されるのである。

もうひとつ、これも従来はほとんど指摘されることはなかったが、実際の版組作業における技術の低下である。それは戦時期に大量に発生している。若い熟練の活字工や有能な校閲者が戦争に動員されたせいであろう。出版社の編集能力が著しく低下している。それに紙質の低下、安価のフランス製本が輪をかける。戦争末期のフランス製本の作品集は読むのに支障が発生するほど多くの校訂・校閲のミスがある。さらに終戦直後の雑誌等に発表された作品には新旧漢字の混乱と誤記が頻出している。定本、もしくはテキストを安定させるためには細密な注意を要する。

文学作品の定本、もしくは新たなテキストを定める場合はこうした版組の歴史、習慣を理解する必要がある。生成過程におけるテキストの変遷は重要であるが、テキスト至上主義はこうした版組の揺らぎ（ミスや版組文化）を考慮に入れなければならない。

5. 張赫宙研究の展望

張赫宙文学研究の将来的な展望は必ずしも明るいものではない。これは張に限ることではなく文学研究一般が置かれている状況によるものである。歴史的に概観すれば、張赫宙文学への評価は時代に翻弄されながら、親日文学や国策文学といった汚名や忘却から徐々に再注目されてきたと言える。東西冷戦構造の崩壊や南北朝鮮における政治情勢の変化など、目まぐるしい政治的な枠組みの変化に伴い、他方ではポストコロニアリズムの隆盛やカルチュラルスタディーズなどの新たな研究方法などによって、以前の否定的な評価は大きく改善されたと言える。研究も飛躍的に深まった。それはとてもよいことである。

筆者が編纂した二冊の選集はこうした時代の線上にあり、その結果でありながら同時に先導するものでもあり、ある意味ではそれを総決算するものでもあると思っている。しかし、高度情報化という時代の大きな趨勢から類推すると、今後において張赫宙文学の選集が再び編まれることはきわめて難しいように思われる。むしろ今日ほど注目されることはないかいしれないと危惧している。二〇二二年編集の張赫宙日本語文学選集の「はしがき」で、筆者は「はたして後続の作品集が編まれる日がいずれ来るのだろうか。それは後生にお任せする次第である」と結んだが、それは筆者の悲

観の表われである。もちろんこうした見解も張赫宙文学の問題ではなく、文学作品や文学研究一般が置かれている現状からの憂慮である。とはいえ、二冊の作品集に収められた張赫宙の作品群は、「近代朝鮮経験した波乱と苦難に満ちた記憶の一端」であり、「張赫宙が到達した最も記念すべき文学的頂点」であったことは間違いない。近代朝鮮における記憶の原型であることは変わらない事実であろう。編集二冊と併せて本論はそうした記憶の最終整理作業に近いかもしれないと思っている。

〈付記〉

本論は、科研基盤研究 B（今野喜和人代表「「言語・メディア・文化を横断するアダプテーションの総合的研究」）の研究報告書に該当する。筆者の分担課題は「張赫宙文学の総合的な研究」であり、その成果の一部はすでに『張赫宙日本語文学選集・仁王洞時代』（作品社、二〇二二年）にも収めた。なお、本論の内容は筆者によって編集された二冊の張赫宙作品集の内容とやや重なるところがある。